

## Outlet obstruction に対する dynamic defecography の有用性

後藤友彦 栗原聰元 新井賢一郎 白坂健太郎  
塩川洋之 龍 雅峰 小池淳一  
岡本康介 船橋公彦 寺本龍生

東邦大学医学部外科学講座（大森）一般・消化器外科

Outlet obstruction（便排泄障害）には直腸瘤（直腸腔壁が弛緩し排便時に便塊により直腸前壁が腔内に突出する）、直腸重積（直腸粘膜が下垂し肛門管内に重積する）、アニスムス（排便時に弛緩すべき恥骨直腸筋が逆に緊張する）などの疾患がある。その診断は問診、直腸指診では困難なことが多く、単なる便秘として治療される傾向にある。正しい治療が行われなければ、排便時の過度の息みにより症状は更に悪化する。

Dynamic defecography（排便造影）は排便時の直腸下部、肛門管、会陰の動態を明確に示すことが可能で、outlet obstruction の診断とその治療方針の決定に重要な情報を提供する有用な検査法である。

検査方法は、検査用バリウムの空き瓶に調理用小麦粉70gと130%バリウム200mLを入れシェイクして作製した擬似便を、直腸内に挿入した15Frネラトンより直腸内に200mL注入し、テレビレントゲン台に設置した専用便器に被検者を座らせ、擬似便排泄の状況をレントゲン撮影する。

動画として撮影したビデオにより、直腸粘膜の動き、直腸腔壁の動き、肛門直腸角の開大の状況などをくり返し観察することにより正確な診断が得られ、治療方針も決定される。

検査は全て外科医師が行い、直腸指診の所見と造影所見を関連付け、さらに治療や術後のfollow upまで行っている。この一連の行為は直腸肛門機能性疾患の診断能力の向上に寄与している。

今回、検査の実際と、これらの症例のdynamic defecographyを供覧し、その有用性につき報告する。